

修復の権限はいかにして移譲されるか？ — 多人数会話における第三者修復の事例を通じて —

岡本 雅史† 榎本 美香‡
Masashi OKAMOTO Mika ENOMOTO
成蹊大学理工学部†
東京工科大学メディア学部‡

Abstract: In everyday conversations there can be seen many repair sequences which give solutions to communicative troubles between a speaker and hearer(s). The main objective of this paper is to investigate how the 'third-person repair' in multiparty conversation can be organized in the view of an integrated model of interaction and cognition in verbal communication. In particular, we focus on the communicative status of the third-person repair executor. As a result of our analysis of multiparty conversation data including the communication-challenged, the third-person communicative status is classified into the three categories: *addressee*, *expert*, and *affiliate*.

キーワード：修復、多人数会話、話し手役割、第三者修復

1. はじめに

日常会話では、発音が聞き取れなかったり理解できなかったりする場合、聞き手はトラブルとなったその発話の「修復 (repair)」を話し手に要求し、話し手がそれを修復することで元の会話に復帰する。これまで会話分析 (conversation analysis) で報告されてきたのは、トラブル源 (trouble source) となる発話を行った話し手自身がその修復を優先的に行うための相互行為的な会話の組織化についてであった (Schegloff, Jefferson, and Sacks, 1977; Schegloff, 2007)。しかしながら、3人以上の参加者からなる多人数会話における修復事例を観察すると、トラブル源の話し手以外の者が修復を実行する例がしばしば見られる。例えば、Egbert (1997) は多人数会話における他者修復開始 (other-initiated repair) の事例を分析し、トラブル源の話し手が修復する前に別の他者によって修復が試みられる場合も、なるべく話し手自身が修復を行うように会話がデザインされていることを指摘する。その結果、第三者による修復が行われた場合には、元の話し手自身が改めて修復を行ったり、修復を開始した聞き手が当該の第三者修復を承認せず、トラブル源の話し手による修復を待ったりするような例が見られることを報告している。

本稿の目的は、こうした多人数会話における第三者修復の事例を取り上げ、本来修復を担うべきトラブル源の話し手ではない第三者によって修復を行うことが可能となる条件を探索することにある。特に、これまで話し手優先であることや自己/他者の区別のみが焦点が当てられてきた修復について、非優先的な第三者が修復に関与する際どのような手続きが取られるのかを考察し、会話という相互行為の中でいかにし

て話し手の権限が他の参加者に移譲可能となるかを説明する。

2. 会話に見られる修復

2.1. 「修復」とは何か

会話に見られる修復現象について会話分析の立場から最初に主題として論じたのは Schegloff, Jefferson and Sacks (1977) (以下 SJS, 1977) である¹。彼らによれば「修復 (repair)」とは、発話の産出/聞き取り/理解において生じたトラブルの修復を指すものとして用いられており、旧来の言語学では「訂正 (correction)」とみなされる傾向が強かった現象である。しかしながら、「訂正」という概念は「間違い」や「失敗」を正解で置き換えるという意味が強く、「修復」を用いることで、言葉探し (word search)、表面上は誤りの含まれない言い直し、聞き手に無視される間違い、などの会話の組織化に関わる重要な現象を広くカバーすることができる。とされる。

そして、修復の対象となるものは「修復されるべきもの」ないしは「トラブル源 (trouble source; TS)」と呼ばれ、一般的には話し手が発話中で表出したトラブルの箇所を指す。そして、いずれかの聞き手が、当該トラブルに対しての気づきを表明することを「修復開始 (repair initiation; RI)」と呼び、それを受けて

¹ 彼らはそれ以前にも、会話のターン・テイキング (順番交替) システムについて論じた Sacks, Schegloff, and Jefferson (1974) の中でもターン・テイキングの誤りや違反に対処するためのメカニズムとして修復を取り上げている。

(主にトラブル源を産出した話し手が)当該トラブルを解決することを「修復 (repair)」であると Schegloff らは考えているようである²。しかしながら、実際の会話データを観察すると、修復開始を受けた修復自体が失敗する場合も数多く存在するため、われわれはこれを「修復の実行を試みている」と見るべきだと考え、代わりに「修復実行 (repair execution; RE)」と呼ぶこととした (榎本・岡本, 2010)。

2.2. 修復の担い手

このように修復を規定すると、会話の参加者のうちの誰がトラブルに気づいて修復を開始し、誰が修復を実行するのかということが問題となる。SJS (1977) ではこの修復の担い手を話し手 (自己 self) と他の参加者 (他者 other) によって区別することが提起されている³。これに従えば、修復連鎖は以下の 4 通りのパターンに分類されることとなる (例文中の点線部はトラブル源、下線部は修復実行と筆者らが判断した箇所を示す)。

2.3. 自己開始／自己修復：話し手が自分でトラブルに気づいて言い直す

(1) She was givin me a:ll the people that were go:ne this year: I mean this quarter y' // know

(SJS, 1977: excerpt 10)

(2) 大体土日はすごい混む。(0.121)混むから:

[chiba1132]⁴

(1)の話し手は 'this year' (今年) と言ってしまっただけから、'I mean' (ていうか) で修復を自己開始し、'this quarter' (今学期) と言い直すことで自己開始・自己修復を行っている。一方、(2)の話し手は「混

² 実際のところ、Schegloff らは「開始」と区別される「修復」の定義について明示的な定義を与えているわけではない。一連の修復連鎖において「修復操作を「開始」する者が必ずしも、修復を「遂行/達成 (perform/accomplish)」する者とは限らない」という主張の直前では「修復セグメントの「開始」と「完了 (completion)」が全く異なるものであり得る」としており (SSJ, 1977: 364)、この箇所だけでも「遂行/達成/完了」という複数の用語が「開始」と対比的に用いられている。

³ この区別は本人たちも自覚しているように、G. H. Mead や C. H. Cooley らに代表される草創期のアメリカ社会学や古典的なヨーロッパ社会学の伝統に則ったものであり、会話分析という新しい学問を旧来の社会的な流れに位置づける意図があったのではと思われる。

⁴ これはわれわれが分析に用いた会話データ (5 節を参照) の種類と番号を示している。また、発話例中の括弧内の数字は参加者の沈黙としての「ポーズ (秒)」を示す。

む」まで言った後、一瞬沈黙し、同じく「混む」と言い直している。このように話し手自身が抱えるトラブルは、いわゆる典型的な言い間違えに限らず、他の参加者からはトラブルだと見えないものにまで及んでおり、その意味でも Schegloff らが言うとおり「訂正」には含まれない幅広い修復現象が見られるのである。

2.4. 他者開始／自己修復：聞き手の疑義提出に対して話し手が言い直す

(3) A: Have you ever tried a clinic?

B: What?

A: Have you ever tried a clinic?

B: No, I don't want to go to a clinic.

(SJS, 1977: excerpt 26)

(4) A: あのお姉さんきれいだよね

B: えっ

A: お姉さんきれいだよね

[chiba1032]

(3)(4)の例はともに、話し手の発話が聞き手に聞き取りの問題を生じさせたため、'What?' や「えっ」といった発話で修復を開始し、話し手が同じ発話を言い直すことで修復を実行した例である。こうした聞き取りの問題とは性質の異なる他者開始の例も存在する。例えば次の(5)はグループセラピーでの会話例である。

(5) Ken: Is Al here today?

Dan: Yeah.

(2.0)

Roger: He is? hh eh heh

Dan: Well he was.

(SJS, 1977: excerpt 12)

このとき、Ken が「今日アルは来てる？」と現在時制で尋ねたのに対し、Dan が「うん」と答えたのを、Roger が「(ほんとうに今) 来ているの？」と問い返すことで修復を開始する。それを受けて Dan は「来ていた」と過去時制に訂正することで修復を実行している。この場合、Svennevig (2008) が指摘するように、Schegloff らが他者修復の問題を音声的な「聞き取り (hearing)」や言語的な「理解 (understanding)」の問題とみなしていたのに対し、さらにトラブル源の話者である Dan の発話の会話的/社会的行為としての「容認可能性 (acceptability)」の問題にまで広がっていることに注意が必要である。つまり、Dan の「うん」という返答が含意する「アルが今現在ここに来ている」という事態に対しての疑義を、Roger が Dan の「誤りの特定化 (error specification)」として提出することは、単に Roger がトラブル源を言語的に理解できなかったのではなく、トラブル源の話し手である Dan の行為そのものが受容できないことを示していると考えられる (Svennevig, 2008: 7)。

2.5. 自己開始／他者修復：「言葉探し」に見られるように聞き手が話し手を助ける

(6) B: He had dis uh Mistuh.W. whatever k- I can't think of his name, Watts on, the one that wrote // that piece.

A: Dan Watts.

(*ibid.*: excerpt 13)

(6)の例では、Bが「ミスターW…」と言いかけたところで名前が思い出せないことを表明しており、自身で修復を開始している。これに対しAがその助け舟として修復を実行する。こうした「言葉探し (word search)」ではトラブル源となった話し手自身が修復を実行することができず、他の聞き手が代わりに修復を実行する場合が多い点で他の修復連鎖と異なる特徴を持つ。

2.6. 他者開始／他者修復：聞き手がトラブルに気づいて話し手の代わりに言い直す

(7) A: Yuh know half of the group that we had las' term wz there en we jus' playing arou:nd.

B: Uh- fooling around.

(*ibid.*: excerpt 14)

(7)の例では、Aが‘playing around’と発話したことに対し、‘fooling around’ (ふざけていた) のだと言ひ換えている。このように、トラブル源の話し手がトラブルだと気づかず、他者である聞き手によって開始されるとともに修復される例は一般に数が少ない (Schegloff, 2000: 101)。Schegloffらが主張するように、話し手による自己開始や自己修復の方が聞き手による他者開始や他者修復よりも「優先性 (preference)」が高い現象であると考えられるためである⁵ (SJS, 1977: 373-374)。

こうした修復の担い手という観点から修復連鎖を分類することは、修復に関与する様々な認知的・相互行為的な条件を考察する上で非常に有意義である。しかしながら、これまでの会話分析における修復の研究においては、こうした自己と他者の区別のみに議論の焦点が当たっており、どのような他者によって修復がなされるかまではあまり検討されてこなかった。

3. 多人数会話における修復

二人の参加者による対話では、他者開始や他者修復は必ずトラブル源の話し手ではないもう一方の聞き

手によって担われる。しかしながら、三人以上の多人数会話においては、複数の聞き手の誰が修復の担い手となるかは自明ではない。Egbert (1997, 2004) は多人数会話における他者開始修復 (other-initiated repair) に焦点を当て、次の2つのパターンと特徴があることを報告している。

I. 二人以上の聞き手によって同一のトラブル源に対して修復が開始されるパターン

この場合、聞き取りや理解のトラブルを示すという通常の修復開始ではなく、聞き手同士の提携 (affiliation) や連携 (alignment) を示すことで、話し手が産出したトラブル源に対して聞き手同士が一種のチームを組んで話し手と対抗するという現象が見られるとされる。

II. トラブル源の話し手よりも先に／にかぶって、別の他者によって修復が実行されるパターン

例えば、トイレなどで会話の場を離れていた参加者が戻り際に、「え、何の話？」などと言って修復を開始した場合、本来その話題の責任を持っている話し手ではなく、別の参加者が修復を実行することで、修復を開始した参加者をもとの会話場へ迎え入れる機能を果たすことがある。このように、修復開始が会話場への入出装置として用いられることで、単一の会話場から複数の会話場への分裂 (schisming) やその逆方向への統合 (merging) を促していると考えられる。

一方、トラブル源と一人の聞き手による修復開始の間でたまたま発話を行った他者が修復に応じてしまうケースも存在する。この場合、修復を開始した聞き手がそうした第三者による修復を承認しないで、トラブル源の話し手が改めて修復を行い、それを持って修復連鎖が終了する。

従ってEgbertの観察によると、多人数会話の修復においては相互行為的な連携が志向され、修復連鎖の組織化が会話の参加者間の成員カテゴリー化 (membership categorization) を促す性質がある (Egbert, 2004)。しかしながら、彼女の議論はこうした多人数会話における修復を相互行為的な観点からのみ展開されており、われわれが問題とする、本来トラブル源の話し手が持っていると思われる修復の権限がどのようにして特定の他者によって担われるかについては未だ不明なままである。

4. 話し手役割の多重性

ここでGoffman (1981) の「産出フォーマット (production format)」の議論を思い起こせば、トラブル源となる発話を行った話し手は、その音声面での〈産出主体 (animator)〉であると同時に、発話を選択する〈言語的主体 (author)〉でもあり、さらに発

⁵ SJS (1977) の記述に基づけば、正確には「自己修復」が「他者修復」よりも優先的であるのではなく、「自己訂正 (self-correction)」が「他者訂正 (other-correction)」よりも優先的であるのだが、本稿ではその「修復」と「訂正」の違いには立ち入らないこととする。

言や信念の〈責任主体 (principal)〉でもある。従って、修復されるべき発話の内容に関する権限がこうした多重の話し手役割に基づいて話し手に帰属されるが故に、トラブルを話し手自身が修復することを参与者らは指向するのであろう。しかしながら、Goffmanの産出フォーマットの主体性が複数の担い手によって分担されうること⁶を鑑みれば、話し手以外の参与者にも修復の権限が存在する場合もあって然るべきであろう。従って、こうした話し手役割のいずれかの側面が何らかの理由で他の参与者に担われているが故に、本来トラブル源の話し手によって担われるべき修復の権限が第三者に移譲可能となるとも考えられる⁷。

そこで、本稿では話し手役割の多重性を踏まえつつ、鍵概念として「多人数会話」と「第三者修復」に注目し、その修復連鎖事例を分析する。その意義は、先に触れたように、多人数会話では直接の受け手ではない（つまり話し手にアドレス(address)されていない）聞き手が存在するため、会話における聞き手間のステータスが異なっており、さらにトラブル源の話し手や修復開始した他の参与者以外の者による修復を「第三者修復」として取り扱うことで、従来の「他者修復」概念に含まれるものと含まれなかったものの双方を扱うことを可能にすることにある。従来の概念に含まれるものとしては、トラブル源の話し手ではない他の聞き手による修復実行があり、含まれなかったものとしては、後に検討するように、修復の開始や実行とまでは言えないがそれを補完する行為がある。

5. 分析データ

分析資料としては、筆者らが収録した次の二種類の会話データを用いる。一つは、「千葉大学三人会話データ」と呼ばれるもので、親近性の高い同性どうしの大学生3名の自由会話である。各対話は約10分×12組である。もう一つは、精神障害や高次脳機能障害などの病名が与えられた人々(the communication-challenged; 以下 CC) 2名と健常者1名の組み合わせからなる、同じく3名の自由会話(「DCG データ」)である。CCは、知覚・記憶・学習・思考・判断などの認知機能の不全のため、コミュニケーションを円滑

⁶ 例えば、ラジオやテレビのニュースを読み上げるアナウンサーは、アナウンス自体の〈産出主体〉ではあっても、もとの原稿を書いた〈言語的主体〉でも、そこで表明された見解の責任を担う〈責任主体〉でもないことがほとんどである(Goffman 1983: 226)。

⁷ これは修復以外の例で言えば、社員の不祥事に対し会社全体が〈責任主体〉としてお詫びをしたり、教え子の学会発表の言い誤りを指導教官が代わりに〈発話主体〉としてオーディエンスに訂正したりすることなどの代理が可能となる条件に対応する。

に進めることに支障をきたすことがしばしば生じる。彼らは会話中の脱線、独自の語・文法の使用、無関連な応答、発話の中断など会話上のトラブルの元となる振る舞いを取りがちであり、従って、本研究で対象とする修復現象が頻繁に生じる。こちらのデータサイズは各対話につき、約30分×4組である。

いずれのデータ収録も、会話参与者たちは簡易収録室において丸テーブルに等間隔で着座した状態で会話を行った。会話開始時の話題はサイコロを振って決めるが、途中でサイコロを何度振りなおして話題を変えても、サイコロの目でない話題を話してもよい旨を教示した。そして、各参与者の音声は、単一指向性説話型マイクロフォンを通じて別々のトラックに録音した。また、各自上半身と円座全体の映像を4台のデジタルハンディカムで録画した。本稿での分析にはこれらの記録データと音声トランスクリプションを用いた。

6. 分析結果

6.1. 第三者修復の担い手

上記のデータを分析した結果、多人数会話における修復連鎖で生じる第三者修復には次のようなステータスの違いがあることが分かった。

- (a) **宛先者 (addressee)**
トラブル源の話し手によって言語的／非言語的にアドレスされることで代わりに修復を実行する
- (b) **有識者 (expert)**
トラブル源に対する修復が可能な知識を持っているために、代わりに修復を実行する
- (c) **提携者 (affiliate)**
トラブル源の話し手ないしは修復開始を行った参与者との共有基盤に基づいて、修復の開始や実行を補完する

ただし、これらのステータスは排他的なものではなく、重複可能であることが観察された。以下に具体的な事例⁸をもとにそれぞれのステータスを検討する。

⁸ ここで取り上げる会話データ中の記号については、会話分析の記法と一部重なるが、基本的に異なる独自の表記タグを用いている。以下にその凡例の一部を記す。

ホテル:	非語彙的な長音 (語末)
(L_うん)	感動詞
(D_イロ)	言いさし
(W_ジュオー 授業)	言い誤りや非標準的な発音
(U_そう)	聞き取りに自信なし (オプショナル)
(L_です)	小声 (オプショナル)
(笑_ね)	笑いながらの発話 (オプショナル)
ほんとう?	上昇調 (オプショナル)

6.2. 宛先者

次の例では、トラブル源 (TS) となっているのが 104 の発話で、それに対して B が 105 で修復を開始している (RI₁)。これを聞き取りの問題と解した C は 106 で 104 の内容を繰り返すことで修復の実行を試みる (RE₁)。しかし、B のトラブルは聞き取りではなく発話内容の理解に関する問題であったため、さらに 107 でどこが理解できなかったかを問うことで再度修復を開始する (RI₂)。これに C は応答する代わりに視線を別の参与者 A (=ナオ⁹) に向け、アドレスを変更する。そして 109 で「あ俺」と理解候補を提示することでさらに修復開始 (RI₃) を行う B に対し、「いや(0.327)みんな:まだ」と A が修復 (=第三者修復) を行っている (RE₂)。さらに、111 において B も「あそうかなオだけか」と A の名前を引用することで理解候補を再提示 (RI₄) することにより、そのトピックの説明責任を A に担わせている。

- (8) [chiba1032]: 147.85-161.20
- 101 B: きょう(0.435)きょう飲みに行く
 102 C: たぶん
 103 B: あー
 104 TS C: み未成年が:
 105 RI₁ B: えっ
 106 RE₁ C: 未成年が
 107 RI₂ B: 誰?
 (1.359) [→C が視線を A に向ける]
 108 A: うん
 109 RI₃ B: あ俺?
 110 RE₂ A: 「いや(0.327)みんな:まだ
 111 RI₄ B: 「あそうかなオだけか
 112 B: あれナ「オ(L)あナオはそっか(D_ウ)
 「二月三日だ
 113 RE₃ A: 「うちまだだ 「もうちょっとだよ
 114 C: 「そうだよ
 115 A: ですよ
 116 C: うん
 117 B: そっか

この例から明らかなように、トラブル源の話し手が修復を行わない場面において、トラブル源の話し手 C の視線 (107 の直後) によるアドレスを獲得した A が〈宛先者〉として、さらに修復を開始した B によって名前を引用される (111) ことによって説明責任を負う〈宛先者〉として、第三者修復を行なっている。こうした非言語的・言語的なアドレスは、会話という

また、発話中の「L」「ト」などの記号は発話がその時点で同時に生じたためオーバーラップしたところを示し、データ冒頭の角括弧はそれぞれ、[chiba#####]→千葉大学三人会話データ、[DCG#####]→DCG データを指し、その直後の数字は切り出した会話シークエンスの開始時間と終了時間(秒)を示している。

⁹ データ中の固有名詞は全て仮名である。

相互行為の中で次のターンの担い手を指定し、本来の返答可能性や応答責任に優先することが示唆される。

6.3. 有識者

一方、次の例では TS となっているのが A の 205 の発話で、それに対して 206 で C が修復を開始した (RI₁) のを受けて、すぐさま A も 206 で修復を開始する (RI₂) が、A が修復の本体を実行する前に、第三者である B が 208 で修復を実行している (RE)。

- (9) [chiba1232]: 256.46-264.67
- 201 C: (D_エウ)(D_ウ)(0.108)部活さぼってバイト
 してました
 202 A: 「あー
 203 B: 「おおい
 204 C: 「(D_ミタ)あー+
 205 TS A: +あれか:(0.34)日払い
 206 RI₁ C: ひええなん 「すか
 207 RI₂ A: 「じゃなく 「て(0.287)
 208 RE B: 「日雇 「い
 209 A: 「日雇 「いのか?
 210 C: 「あ
 211 C: 日雇い
 212 C: そうっすね
 213 A: あーまそりゃしょうがねえ

このとき、208 で B による第三者修復が可能となったのは、文脈から 205 で A が言いたかった事柄が何であるかを推論し、それに対する知識を既に持っていたからだと考えられる。言い換えれば、B はこの時点において A に代わって修復を可能にする知識を持つ〈有識者〉であったと考えられる。

また次の例は第三者修復ではなく、トラブル源の話し手である C 以外の二人が次々と修復開始を行う例であるが、いずれにおいても「理解候補の提示」を行っている点で、〈有識者〉に近いステータスを示している。

- (10) [DCG1141]: 546.45-577.82
- 301 C: んだんだん慣れてきましたデイクア:七年
 ぐらい通って(W_ンネンデ|るんで)
 302 A: (W_ウーン|うん)
 303 A: あー七年も通ってるんだ
 304 B: すごいね:
 305 B: 私何年通ってんだろ
 306 A: 何歳の頃から通ってるの?じゃあ
 307 TS C: 二十歳:ぐらいから
 308 A: あっそうなんだ
 309 RI₁ B: えー今二十七になんないじゃん(W_マード|
 まだ)
 310 C: 二十四
 311 B: 四でしょう?
 312 RI₂ A: じゃあ十七?
 313 RE C: 高校終わったらすぐ
 314 A: 高校終わったらすぐか
 315 B: ふうん

316 A: そっか

C がダイケアに通つてもう七年になるというエピソードを語っている中で、306 の A の質問に対し、C は 307 で「二十歳:ぐらいから」と答えて A はいったん納得するが (308)、B は C の現在の年齢を知っているため計算が合わないことを 309 で指摘することで修復を開始する(RI₁)。それに C が自分の現在の年齢を答えたのを受けて、A は 312 で再度修復を開始する(RI₂)。このとき、B は当該トピックに関する知識を持っているため修復を開始することが可能となり、A は会話の連鎖において与えられた知識から推論を行うことで C の答えを先取りしている。

6.4. 提携者

さらに、次の例では、トラブル源となった 401 の B の発話に対し、403 で C が修復を開始する。それを受けて 404 で B は修復を実行する (RE) のだが、それとオーバーラップする形で 405 で A が C の修復実行を補完している。

- (11) [chiba0432]: 432.03-446.20
 401 TS B: ちゆかなんでそんなさ Γ (0.932)喧嘩を
 (0.133)してんの
 402 C: Γ (D_)
 403 RI C: え
 404 RE B: なん Γ そんな(0.29) Γ そんな(D_チャン)態
 度悪いの
 405 RF A: Γ や Γ こいつの(0.291)(D_ウ)
 (D_ウ)高校時代すごかったから
 406 B: あ Γ そうなの
 407 A: Γ まっきんきんでしたか Γ らね
 408 C: Γ いやいやえ
 Γ え
 409 B: Γ まじで
 410 C: でもうちの高校なんか:割と(D_シंगा)
 (0.436)は:結構進学校なんだけど
 411 B: うん
 412 C: まあ茶髪とかまそういうのばっかで

これは、修復の実行とは言えないが、トラブル源となった B の質問とそれに対する修復を開始した C の間に介入し、両者が担うべき修復連鎖を補完することでトラブル解消に協力していると言える。こうした修復連鎖の補完を「修復補完 (repair follow-up: RF)」とここで新たに名付けることとする。

これが第三者である A に可能となったのは、A が以前から C の高校時代の話聞いていたためであり、その意味で〈有識者〉と近いステータスでありながらも、当該トラブルに対して一方の参加者の側に立つてもう一方の参加者に対してフォローアップを行う点で〈提携者〉として区別される。また、注目すべき点として、A が同時に 405, 407 で自分に補完する権限がある根拠を示していることが挙げられる。

同様に、次の例の A も 502 における沈黙によって開始された修復連鎖を解消するために、506 で〈提携者〉として修復補完を行っている。

- (12) [DCG1831]: 1250.48-1263.03
 501 TS C: Bさんは?(0.3)おうちで:(0.4)夜は何して
 んですか?
 502 RI (0.4)
 503 RE₁ C: あの帰ったあとあのあと(0.6)
 504 RE₂ C: ダイケア終わって帰って(0.5)
 505 C: うん:=
 506 RF A: お茶飲むんでしょ
 507 C: お茶飲 Γ むの
 508 B: Γ (L_お茶)
 509 C: <笑>
 510 A: あたしね Bさんち行ったことあるんですよ
 ダイケア終わってから

このとき、502 は通常の意味での修復開始ではないが、C が 503, 504 においてトラブル源となった 501 を言い換えて修復を実行している¹⁰ため、直前の 502 が隣接ペア第二部分の不在としての有標な沈黙であることを示している。従って、会話の場にトラブルが生じているのだが、それを解決すべく第三者である A が 506 で修復補完を行っており、やはりこの場合にも自分に補完する権限がある根拠を示す発話 (510) を伴っていることがわかる。

7. 考察：第三者修復から見てくるもの

上記の分析により、第三者修復を担う参加者のステータスの分類を行うことができた。このとき、会話という言語コミュニケーションを支える相互行為と認知の観点からこの三つのステータスを観察してみると、〈宛先者〉では参加者が言語的/非言語的なアドレスを用いることによって相互行為レベルにおいて修復権限が第三者に移譲/獲得されていることが分かる。一方、〈有識者〉・〈提携者〉は、参加者間の共有知識に基づく認知レベルでの修復権限の移譲/獲得が生じている。従って、会話における修復という一つの現象も相互行為と認知の両者が深く関わっていることの一端が明らかとなった。

一方、修復連鎖の構造に目を移せば、従来会話分析で指摘されていた〈トラブル源→修復開始→修復実行〉という一連の流れに留まらずに、多人数会話で生じたトラブルはトラブル源の話し手と修復開始を行った特定の聞き手の間のローカルな問題というだけではなく参加者全員のグローバルな問題として取り扱われていることが示唆される。本稿で取り扱ったよ

¹⁰ こうした質問の直後に生じた再質問という連鎖構造においてどのような相互行為的な役割があるかは Kasper and Ross (2007) が詳細に論じているが、紙幅の都合により本稿では取り上げない。

うな第三者がトラブルの当事者の間に介入し、修復を補完することでトラブル解消に協力する現象や、榎本・岡本 (2010) で観察された修復開始と修復実行によって得られた結果を参与者全員が最終的に承認する「修復の承認フェーズ」の存在もその証拠となる。

さらに、〈提携者〉による修復補完では他の参与者に対して自分に補完する権限がある根拠を示す発話を伴う傾向があることから、単なるトラブル源を解消可能な知識を〈提携者〉が持っているというだけではなく、自己の認知状態を相互行為の中で提示することを選択する、いわば自己と他者の認知状態をモニタリングしながら会話に参加する側面も無視できないだろう。

8. おわりに

本稿の目的は、多人数会話における第三者修復の事例分析から会話という相互行為の中でいかにして話し手の権限が他の参与者に移譲可能となるかを解明することであった。そして、聞き手のステータスの違いを明確化するために複数の聞き手が関与する「多人数会話」を取り上げ、話し手が会話の中で果たしている役割がどのようなものであるかを考察するために話し手の代理としての「第三者修復」に注目した。さらに、データ分析から第三者修復を行う聞き手のステータスが〈宛先者〉・〈有識者〉・〈提携者〉の三つに分類されることを示した。

今後は、参与者が自身の認知状態と他者の認知状態を内的に調整しながら、それを相互行為として外的に提示することで他者との会話を紡ぎあげていくのかという視点から、修復とその類縁事例の分析をさらに進めることで、会話における認知とコミュニケーションの相互関係を明らかにしていきたいと考える。

謝辞 本研究は文部科学省科学研究費補助金、新学術領域研究（研究課題提案型）「逸脱を吸収する社会実

現に向けたコミュニケーションギャップ生成—解消機構の解明（課題番号：20200043）」（研究代表者：榎本美香）からの助成を受けて行われたものである。

参考文献

- Egbert, M. M. 1997. "Some Interactional Achievements of Other-initiated Repair in Multiperson Conversation." *Journal of Pragmatics*, 27, 611-634.
- Egbert, M. 2004. "Other-initiated Repair and Membership Categorization: Some Conversational Events That Trigger Linguistic and Regional Membership Categorization." *Journal of Pragmatics*, 36, 1467-98.
- Goffman, E. 1981. *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Kasper, G. and Ross, S. J. 2007. "Multiple Questions in Oral Proficiency Interviews." *Journal of Pragmatics*, 39, 2045-2070.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., and Jefferson, G. 1974. "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation." *Language*, 50(4), 696-735.
- Schegloff, E. A. 1992. "Repair after Next Turn: The Last Structurally Provided Defense of Intersubjectivity in Conversation." *American Journal of Sociology*, 97(5), 1295-1345.
- Schegloff, E. A. 2000. "When 'Others' Initiate Repair." *Applied Linguistics*, 21(2), 205-243.
- Schegloff, E. A. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis Volume 1*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., and Sacks, H. 1977. "The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation." *Language*, 52(2), 361-382.
- Svennevig, J. 2008. "Trying the Easiest Solution First in Other-initiation of Repair." *Journal of Pragmatics*, 40(2), 333-348.
- 榎本美香・岡本雅史. 2010. 「多人数会話において修復はどのように生じるか—コミュニケーションにハンディキャップを抱える人を含む雑談データを通じて—」, 日本認知科学会第27回大会予稿集 (CD-ROM), P-1-46.